

九州産業大学大学院

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL



令和2年度 研究成果発表会

Sense and Sensibility (1811), *Pride and Prejudice* (1813), *Emma* (1815)におけるヒロインの精神的成熟と作者Jane Austenの作家としての円熟

博士前期課程

国際文化研究科 国際文化専攻 国際文化研究分野

主査 志水智子
副査 河野賢司
呉紅華

1. 研究の意義

本論文ではイギリスの女流作家Jane Austen(1775~1817)の*Sense and Sensibility* (1811), *Pride and Prejudice* (1813), *Emma* (1815)の3作品からヒロインおよびヒーローの精神的成熟とJane Austenの作家としての円熟を読み取っている。それぞれの作品に注目した先行研究はあったが、3つの作品を比較し、Jane Austenの作家としての円熟に着目したものは少ない。

2. 修士論文の概要

序論では、Jane Austenが先輩作家Henry FieldingやSamuel Richardsonから影響を受けていることを述べた。

第I章では*Sense and Sensibility* (1811)を感情に溢れた人物たちの物語として読んでいる。先行研究はJane Austenは本作を通じて理性の重要性を主張したと捉えている。しかしながら、一見理性的に見える人物も強い感情を内に秘め、それが重要なところで発露し、作中で最も感情に溢れた人物のMarianne Dashwoodは、激情が精神的成熟のきっかけとなり、激情の利点を見出すことができる。そう考えると本作を通じてJane Austenは理性の重要性ではなく、感情を発露させることの重要性を説いたのではないか。

第Ⅱ章では*Pride and Prejudice* (1813)を取り上げ、本作に伝統的な価値観に迎合することのないヒロイン像が示されていることを述べている。18世紀のイギリス社会では結婚は家同士の結びつきであり、当事者間の愛情は問題にされなかった。そのような時代においてヒロインElizabeth Bennetは結婚の基盤に当事者同士の合意と愛情を据えた。ここに彼女の価値観の革新性が見られる。ヒロインは自分の価値観を信じ、他者の意見に惑わされなかったため、自分の望む結婚の形を手に入れることができた。しかし、「自分の価値観を信じ、他者の意見に惑わされない」というのは自分の考えに対する執着にも繋がる。ヒロインは自分の価値観に執着し、他者の意見に耳を貸さないために失敗を犯す。その失敗が彼女の精神的成熟の原動力となることを述べる。

第Ⅲ章では、*Emma* (1815)を自己を客観視できないヒロインの物語として読む。まず、ヒロインのEmmaが自己を客観視できなくなった要因を彼女の成育環境から解き明かす。次に、21歳となった現在も自己を客観視できていないことを他者との関わりを分析することで明らかにする。最後に、自己を客観視できないヒロインに訪れた悲劇とそこからの気づきについて述べる。

第IV章では、これまで論じてきた3作品について、精神的成熟をテーマとしたBildungsromanとして捉えなおしている。最終的に3つの作品を比較して、Jane Austenの洞察の深まりおよびリアリズム作家としての円熟を指摘している。

結論では、Jane Austenが精神的成熟と幸せな結婚という主題を書き続けた意図を考察した。彼女が、作家人生を賭けて書き続けたBildungsromanと幸せな結婚というテーマは後進の作家たちにも受け継がれていることを述べている。結論では一例として、Charlotte Brontëを取り上げた。彼女はAustenを手厳しく批判しているが、Charlotte BrontëによってAustenのこだわったBildungsromanと幸せな結婚というテーマはさらに追求されている。

指導教員コメント

この論文はJane Austenの3つの作品を共通する観点から考察し、オリジナリティのある一つの研究にまとめたものである。著者は先行研究となる論文を多く読み、自分の研究の独自性をいかに出していくかを考えながら論文を進めていた。登場人物の精神的成長に焦点を当てるという発想は伝統的な考察方法ではあるが、これまで論じられることが少なかったポイントにも良く注目し、論文を構築している。

結論では3つの作品をオリジナルな視点からつなぎ、Austenをイギリス文学の中で評価することを試みており、俯瞰的な視点を披露できている。作家としてのAustenの手腕を評価することで、研究活動の奥行きを披露できる論考に仕上がっているといえる。

志水智子